
あなたの懺悔は何ですか？

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの懺悔は何ですか？

【Nコード】

N4551Y

【作者名】

わたるくん

【あらすじ】

俺を助けてくれるのは悪党ばかり！？

殺し屋、強盗犯、サギ師、麻薬密売人、悪徳警官、闇医者、etc

……

宇佐美宗也の務める会社は、不況の風にあおられて倒産してしまっ
た。

今年で満二十五歳、突然の事態の困惑した宗也の行動は、なんと傷
心旅行！！

自分を見つめなおすため、遠く離れたイギリスまでやってくる。

そこで巻き込まれる大きな事件。宗也は無事生き残ることができるのか！？

ボーイ・ミーツ・ガール

ロンドンにある裏通り――

宇佐美宗也うさみ そうやは、男たちから必死に逃げていた。

（なに……が、いつたい何が起こったんだよ！ どうして……俺が追われなくちゃならないんだ！？）

息も絶々（たえだえ）に、深夜の人通りのない石造りの街並みを駆けぬける。

初めて訪れた街の道など知っているはずもない。それでも後ろを追いかける数人の男から逃げだすために、とにかく走り続けた。

後ろを振り返ってみる。

ピシッとした黒服を着た強面のお兄ちゃんズも、今では汗だくになつて追いかけてくる。

別に宇佐美宗也はすごい陸上選手でもなければ、力と体力自慢のムキムキマツチョ君でもない、ただの会社員だった男だ。そんな一般市民が、映画の中でしか登場しないような人たちに敵う訳がない。しかも拳銃まで所持しているっぽい方たち相手に、どうしろと？ もう逃げる一択しか選択肢がないじゃないか。

一応、住宅街だということもあり発砲とかはしないようで、今までなんとか逃げ延びてはいるが、捕まったら最後どうなるかなんて解ったもんじゃない。

とりあえず視界に入ったゴミ箱を蹴飛ばし、時間を稼ぎながら走り回る。

そう、今思えばあの会社が悪いのだ。この不景気の中、小さいけ

どもようやく就職先を見つけて入社したはいが、数年もしない内に会社が倒産。

それを知らずに出社した俺たちの前に、突然派手なスーツを着た方たちがドアを蹴破る勢いで入ってきた。

いきなりすることに戸惑う社員だったが、彼らが言うには、社長が相当な額のお金を借りていたのに昨夜の内にお消えになられた。なので、とりあえず社長の搜索と会社にあるすべての物を押収しよう。とここへやって来たらしい。

んなバカな……。

少ない社員一同みな茫然としていたが、ペタペタと赤い押収と書かれたシールを貼られるのを見て、だんだんとこれが現実だと理解したみたいだ。

それと同時に、全員に社長がどこに行ったか知らねえか？　なんて、ドスの効いた声で詰め寄られるんだから恐怖のレベルも半端じゃない。

だって若い女性社員なんて少し泣いているし。

終いには、軽い尋問まがいなことまでされてしまう。その後は家に帰っても良いらしく、俺も含めて全員急いで会社から出て行った。しかし最後に、 teme エラ社長の居場所が分かったら、ちゃんと連絡しろよ？　もし言わなかったら、海にでも……

（“海にでも……” ってその後のセリフなんですか！？　そんな凶悪な笑顔で言われたら、すごいよろしくない事になりそうだ！！）
とも思ったが、そんなことを口に出して聞き返せるわけもなく、そそくさと家へと逃げ帰った。

後日、仕事がなくなってしまった宗也は職業斡旋所に何度も通うはめになるのだが、この就職難な時代に、高待遇な職種が見つかるはずもない。

そんな時、ふとあることが頭を過ぎったのだ。

（そうだ！　海外へ傷心旅行に行こう！！）

今になって思えば、何でこんなことを考えたのかは分からないし

脈絡すらもないが、八方塞りなこの状況に、少し頭がおかしくなっていたのだろう。

しかし、それを本当に実行してしまったのだ、そこでどんな事件に巻き込まれるかも知らずに……。

そんなことがあり色々と考えた結果、ここイギリスへと旅行に来た。

ツアーで行くのも自由な時間がなくなりそうだったし、なるべく一人にもなりたかったので、すべて自分で手配してこの地にやってきたのだ。

イギリスのヒースロー空港からロンドンを中心として、いろいろ名所を回るつもりでいたのだが、最初の方はまだ良かった。

見たことも無い建造物や街並みに興奮しながら、初の海外の思い出にと写真を取りまくり、テレビなどでしか見たことが無いロンドンの風景を満喫していく。日本での嫌なことや時間も忘れて夢中になっていると、だんだんと日も暮れていく。

イギリスも先進国の一角だ。日本ほどではないにしろ治安はいいとは思うが、さすがに何かが起こっては遅い。

後ろ指を引かれながらも、あらかじめ予約しておいた宿へと足を向けた。

宿：コッペリア

薄汚れた建物に陰気な雰囲気。目の前に建つ宿に少し思うところもあったが、少しでも安く済ませるためにこの宿を選んだ。

ロンドンは観光地のためか、ホテルの値段は以上に高い。だいたい一泊あたり80ポンド、日本円で約10,140円ほど。そんなお金は逆立ちしても出てこないの、一泊30ポンドという激安ホテルだ。もちろんルームサービスなどはまったくない。ただ寝るだけの空間を提供してもらうというだけだ。

深夜、宗也は喉が渴いたので、キーを預けて近くの酒屋で酒を買おうと外出した。ホテルの店員さんに店の場所も聞いたのでバッチ

リだ。

一応、宗也は大学を卒業した身だ。しかも外国語学部だったので、日常会話くらいの英語ならなんとか話せるレベルである。

宿を出て、暗い夜道を一人で歩き出した。

やはり初めての海外のため、最初は緊張のせいで不安もあったが、一人で見知らぬ外国の土地を歩いているという達成感にハイなテンションになってきた。軽く鼻歌を歌いながら酒屋へと歩いていると、街灯のない真っ暗な通りの隅でなにかを殴打するような鈍い音が聞こえた。

普通なら無視するところだが、今の俺は、一人で何でも出来るもん、な状態である。

音のした方へと近づき建物の角から覗き見ようとすると、ぼんやりと人影のようなものが見える。暗がりによく見えないので、少し目を凝らす。すると、何人かが集まって地面に向かって棒状の物を叩きつけているようだ。

誰かが遊びかイタズラでもしているのか？　と思っていたが、次第に暗闇に目が慣れてきたため、その光景をはっきりと見る事ができた。

いや、見てしまった（……………）。

円を囲むように複数の男が、鈍器を振り下ろしている姿。

その中心には、倒れている一人の男の姿。

倒れている人の頭と身体からは血が大量に流れており、ピクリとも動かない。それでも執拗に殴り続ける黒服を着た男たち。

そのあまりの衝撃的な光景に、宗也はウツと声を上げ、胃から込み上げる吐き気を必死に押さえ込んだ。

その声に反応したのか、男たちは殴るのをやめて宗也の方へと視線を向けた。そして驚きの表情と恫喝が飛び、突然コチラに走ってくる黒服たち。

危険な状況を理解した宗也は、彼らに背中を向けて駆け出した。

ここから夜の街での大逃走劇が始まった。

「ちきしょうー！！どこまで追っかけてくれば気が済むんだ！！」
宗也は叫び声を上げながら、人通りない道を一気に走り抜ける。
今は月も隠れてしまっているせいか、不気味な雰囲気漂っている。

街の景観を大事にしているのか、ただ設置していただけなのかは知らないが、街灯すらギリギリ道の輪郭が分かるくらいしか無い。
こんな街だったらジェysonさんもフレディさんもやりたい放題だろうさ！！　　と心の中で絶叫する。

時おり、微かに雲の隙間から漏れ出る月の光が、宗也の流す涙をキラキラと輝かせていた。

「だれかー！　ヘルプミーー！！」

大声を上げてても周りから反応しない状況に悲しくなる。

チラリと後ろの方々を振り返ってみるが、やはり諦めてくれる様子もない。

すでに逃げ始めてからかなりの時間が経ち、宗也の足は限界に近づいていた。

これはいよいよ詰んだか？　と諦めかけたその時、視界の隅に古い教会が見えた。これが最後のチャンスだと思い、残りの力を振り絞って駆け抜ける。

（神様！　俺は仏教徒なので筋違いかもしれませんが、どうかお助けを！！）

死に物狂いでたどり着くと、教会の扉に体当たりでもするかのよう
うに、

「助けてください！誰かに追われているんです！！」

宗也は、教会の扉に腕を力強く叩きつけた。何回も、何回も、叩

いても返事はない。すぐ後ろには、黒服の男たちが迫ってきている。
「だれか、誰かいませんか!？」

絶望を感じながらも、可能なかぎりの大声だした。

「何だよ……うるせえなあ。今、何時だと思つてやがんだよ」

すると中から人の気配と寝起きの声が聞こえ、微かな希望が芽生えてくる。

「すいませんっ。怪しい人たちに追われているんです！　お願いですから中に入れてください!!」

慌てているせいか早口になってしまったが、ガチャリと木製の扉が開かれた。

「ああん？　誰だよテメエ……」

「ぬあっ!？」

扉を開けた人物を見て宗也は驚き、悲鳴を上げてしまう。

出てきたのは年若いシスターのようだが、その鬼でさえも殺してしまいそうなほど凶悪な目。“私は人を百人殺しました”と言っても、簡単に信じてしまいそうな貫禄を醸し出していた。

彼女のレーザーのような恐ろしい視線に、今までの状況を忘れて身体を縮こませる。

その姿は近くでみると、ライオンに睨まれる生まれたばかりのシマウマのようだ。宗也の反応に彼女は気が立っているようだが、通りの向こうから走ってくる黒服の男たちを見ると、片眉を吊り上げる。

「おい！　何、ぼーっとしてんだ!!　さっさと中に入れ、アジアン!!」

まだ恐怖で動けない宗也の首下を掴んで、教会の中に引っ張り込む。為すがままの宗也は、その勢いに押され床に頭をぶつけてしまった。

「いてえ!!!」

そのおかげで目が覚めたのか、激しい痛みで我に返る宗也。それを無視して、シスターは教会の扉を勢いよく閉めて鍵をかけ

た。さらに、中に並んでいた机や椅子を扉の前に何個も積み上げて、簡単なバリケードを作っている。

その時、扉を叩きつける音と男の怒鳴り声が響いてきた。

「おるあー！！　よくもここまで逃げやがって、出てこいやあクソヤロー！！」

「ヒイヒイ！？」

情け無い悲鳴を上げながら、奥へと逃げる宗也。

「おいおい……。テメエは男だろ、もつと堂々としてろよ。」

呆れたような表情をしながら、シスターは修道服からゴツゴツとした金属製の物体を引き抜いた。

宗也はそれを恐々と見ると、

「つて、それ拳銃だろうが！！　なんでシスターがそんなもん持つてんの！？」

「ハアン？　そりゃーアレだ。どつかの神も言っただろ“人様に迷惑をかけるなら、いつその事死ね”つてさ」

さも、当前のように言うシスター。

「んな殺伐とした神様がどこにいるんだよ！？　そんなの神様というより、悪魔に近いだろ！！」

「なに言っただよ。聖書じゃあ悪魔も神の一部だろ、ほとんど同じじゃねえか。それに悪魔って呼ばれてるヤツよりも神の方が圧倒的に人を殺してるからな、そんなヤツを信じてる方が……これ以上は職業柄なあ」

「シスターのくせに、神様を信じて無え！？」

そして、ついに教会の扉が男たちによつて破られた。一斉に中へとなだれ込む黒服ズ。手には拳銃が握られている。

それを見て、宗也は慌てて礼拝堂にある教壇の下に隠れた。

「おらあ！　どこに隠れやがった、出てこい！！」

もうここまでかっ！？　と諦めかけていた時、暗闇から一発の銃声が鳴り響いた。

その音とともに、黒服の一人が床に倒れこむ。

「だれだあ！？……グウアッ！！」

さらに続けて一発だけ銃声が鳴ると、叫んだ男がまたもや倒れる。
「クソッ、全員固まれ！！」

薄暗い教会の中で、次々とやられる仲間を見て一人に黒服が叫んだ。

「いけねえなあ……一箇所に集まるなんて、ただ殺してくれなんて言ってるようなもんだぜ。最近のマフィアは狩りのやり方も知らねえのかい？」

ズガガガンッ！！

密集する男たちを嘲笑うかのように、暗闇から赤い火花が^{ほとばし}る。それと同時に辺りを警戒していた男たちは小さな悲鳴とともに地面と熱い抱擁を交わすのだった。

タッタッタッタ……

中にいる黒服をすべて倒し終わると、外から何かが遠ざかるような音が聞こえてきた。シスターはチラリと外を一瞥すると、遠くへ走り去る一人の黒服が見える。どうやら一人だけ外で待機していたようだ。

その姿に目を細めて舌打ちするも、それを無視して宗也に近づいていった。

「もう終わったぜ。いつまでも小動物みたいに隠れてないで、さっさと出てきたらどうだ？」

拳銃をしまい、教壇の方へと声をかけた。

「終わったのか？」

少しだけ教壇から顔を覗かせて、そのままあたりを確認する。

「ああ、テメエが泣き喚いてる間にな。神聖な教会に土足で踏み込みやがって……まったく、こいつ等を今すぐにブチ殺してやりたいところだぜ」

忌々しそうに呟きながら、転がっている黒服を蹴り飛ばす。

「おい、アジアン。こいつ等を外に放り出すから手を貸しな」

宗也はおずおずと教壇から這い出て、シスターに近づいていく。

「なあ……この人たちはみんな死んでるのか？」

倒れこむ黒服を見て、恐る恐る尋ねた。

「ハアン？ 死んでるように見えるのか？ 血も流してねえのによ」よく見てみると黒服たちは気絶はしているようだが、血は一滴も流してはいなかった。

（もしかして、ゴム弾が何かで撃ったのか？）

疑問に思いながらも、とりあえず死んでいないことに少なからず安堵して、言われたようにシスターと男たちを外へと運び出した。

そのまま壊れた扉の前に、無造作に放り出す彼女。

「ちよつと待て！？ そこに置いたままでもいいのか？ 目を覚ましたらまた襲ってくるんじゃないか？」

「大丈夫だってーの。特別製のシヨック弾で撃ったんだぞ？ 丈夫なヤツでも丸一日は意識は戻らねえよ」

何かよく分からないが、大丈夫らしい。

（アレか？ 漫画とかである、着弾すると電気が流れるゴム弾のことか？）

倒れていた五人を全員運び出し、二人とも教会の中へ戻った。戦闘で散らかった礼拝堂を突っ切り、奥にある小さな扉の前へとシスターに案内される。

そして宗也は扉の上に書かれている文字を読んだ。

（懺悔室？）

中に入って少し待っていると云われたので、大人しく部屋へと入った。

そこは一人しか入ることができないような狭い空間で、宗也が椅子に座っただけで、圧迫感を感じるほどだ。

しばらく中で待っていると、入ってきた扉の対面にある壁に突然小さな四角の穴が開いた。

「それでは何があなたに起こったのか、私に教えていただけませんか？」

そこから、女性の優しい声色が聞こえてくる。

「……だれ？」

まさか、凶悪シスターの他にもまだこの教会に人がいたのか？と疑問に思う宗也。

「何を言ってらっしやるのですか？ 先ほどあなたを助けて差し上げたではありませんか」

「ええ！？ じゃあ、あの拳銃を持ってたイカレたシスターさん！？」

(……………)

無言になり、壁の向こう側からすごい怒気を感じるが、何事もなかったように話を続けられた。

「とりあえず、ですね……まずはテメエ様の名前から教えていただきますしょうか。こんなふざけた連中をご招待してくれたクソヤロー様の名前を」

「ちよつと待て！ 口調が戻りかけてる！？」

やっぱり怒ってらっしやったみたいだ。

明らかに不機嫌な彼女に、尻すぼみしながらも潔く答える。

「宇佐美宗也うさみむねやです。日本から旅行に来ました」

「日本人のですか、その割に流暢な英語を話されているみたいですね」

「それは一応、外国語系の大学を出て、勉強もしたからさ……専門用語とかじゃなければ、ある程度は話せる」

彼女から聞いてきたくせに、へえーと興味なさそうに返事をした。
「まあ、そこまで英語がお話できるのなら話は早いですね。あなたのような一般人、しかも愛と平和を謳^{うた}っている日本人が何故追われていたのですか？」

宗也はこれまでの宿から教会までの逃走劇のことを思い出しながら、彼女に伝えた。すると、

「それはまた……不運なことですね。ですけど、これからどうするのですか？ おそらく、逃げ帰った黒服の方があなた様のことを報告して、また追われることになると思いますよ」

「改めて言わないでください……薄々（うすうす）、解^とっていていましたから。だから、どうしようか悩んでいるんだ」

両手で頭を抱え込む。その様子を見てシスターは、
「そんなにお困りのようでしたら、私があなたをお助けしましょうか？」

「助けるって……教会のシスターさんが、何を？」

確かに、先ほどは教会に直接踏み込まれたので、手を貸してくれたのかもしれないが、特に彼女が宗也を助ける義理など、どこにもないはずである。逆に厄介ごとを持ち込んでしまったことに対して、激怒するならまだ理解できる。しかし、彼女がわざわざ助けるなんてどう考えてもおかしい。

（仮に理由があるとしても、彼女は何から俺を助けてくれるんだ？
アレか、また銃撃戦か??）

「それは……私が唯一信じているこの銃で……」

「おいしいい！ なに予想通りに物騒な解答してくれてんの!?
その前に“唯一信じている銃”ってなんだよ、神様とか信じてないのか!? いやっ言うな！ さっき凶悪シスターモードだった時のセリフ憶えてるから!!」

彼女の返答に、つい勢いだけでツツコミをしてしまう。

「ふふっ、ソーヤさんは中々に愉快な方そうですね。……………けどなあ、あんまり俺の機嫌が悪くなるようなことを言うなよ。誤っ

てデメエの尻の穴を増やしちゃうかもしれねえからな」

「ヒイイイ！？ 申し訳ありませんでした！！ フゴッ」

狭い懺悔室の中で頭を下げたせいか、目の前の壁に頭をぶつけてしまった。

「解ればよろしいですよ。それに、無理に私の助けを受ける必要はございません。手取り早いのは警察に行つて保護してもらつてとですね。……まあ、すぐに日本に帰らなくちゃならないとは思いますが」

助けてくれると言つたわりに、以外にも簡単に引き下がるシスター。

「やっぱりそうなりますか。わざわざ助けてくれると言つてくれたのにすいません」

「いえいえ、それでは今夜はこの教会にお泊りになりますか？ 一晩くらいでしたら、お部屋をお貸しますよ」

「そんな、いいんですか？ 俺がここにいと、また迷惑をかけることになるかもしれませんよ」

「それは今更ですね。一応ここも神のお膝元ですから、“迷えるバカ”をお助けすることは当然というものです」

「そこは普通、迷える子羊なんじゃあ……」

不安を覚えつつも、宗也はシスターの好意を素直に受けることにした。

しかし、懺悔室を出て部屋に案内されるかと思いきや、何故か再び礼拝堂へと連れ去られてしまう。

「では一晩お泊めする代わりに、一人でここの掃除をお願いしますね」

「ええっ！？ このめちゃくちゃに散らかつてる礼拝堂を一人で、ですか！」

驚いている宗也に向かつて、シスターは女神のような笑顔で答える。

「はい、寝不足はお肌の天敵なんです。それにこうなったのもあな

たが原因ではないですか。しっかりと責任は取ってもらわないと…
…テメエをブチ殺す」

「……はい」

「あつ、言い忘れていましたが、掃除が終わるまで寝ることは許しませんからね。これも神への奉仕だとも思ってください」

シスターは女神のような笑顔でそれだけを言い残し、一人奥の部屋へと姿を消した。

それをただビビリながら見送るしかない宗也。

その後、ため息を吐きながらも仕方なく掃除を始めるが、どれだけ頑張っても朝まで終わることはなかった。

無論、一室部屋を貸してもらった所か、寝ることすらもできなかった哀れな宗也であった。

リナリス・J・フォルスター

（はああ……やっとキレイになった）

宗也は、ようやく礼拝堂の掃除を終えた。

壊れた扉の付近に、バリケードのように組まれていた椅子や机を元の位置に戻し、破損した物や空薬莖などのゴミを、教会の外に設置されていた焼却炉へと放り込んだ。

昨夜の戦闘が終わって、掃除を始めたのが深夜三時ごろだったはずなのに、上を見上げれば建物の隙間からは太陽が顔を出している。手を真上に掲げ、グウーっと伸びをしてみれば、就職してから運動していなかった身体がギシギシと鈍い音を奏でる。軽い痛みが走る腰を擦りながらも、チラリと扉付近に目を向けた。

そこには、黒服を着た男たちが四人仰向けになって寝転がっている。彼らはシスターに“ショック弾”なる非殺傷の銃弾で撃たれたまま、未だに目を覚ます気配すらない。一応、昨夜シスターに散らかっている所を片付けておけと言われたが、正直この扉の前にゴミのように散らかっている強面の方たちはどう片付けるといいのか。（っていうか、これを片付けるって表現はないだろう。アレか？ 任侠ドラマとかにあるコンクリに詰め込んで海に投げ込んだっていう意味か??）

しばらく頭を抱えて悩んでいたが、礼拝堂の中という訳でもないし……という適当な理由で放置しておいた。

教会の中へと戻り、先ほど元の位置に戻した椅子に腰掛けた。そのままため息を吐きながら、背もたれに体重をかける。

「結局ここに泊めてくれるとか言いながら、まったく休むことができなかったな」

ポツリと小さく文句を言いながら、昨日のシスターのことを思い出す。

黒服の男たちをたった一人だけで倒し、神に仕えているとは到底

思えないほどの暴言を吐く凶悪シスター。

最初にエンカウントした時など、恐怖のあまり情けない悲鳴を上げてしまったほどだ。

そして懺悔室で話した彼女のキャラの変わりよう。あれはもう二重人格と言ってもいいくらいだろう。

もしくは、“実は私たち双子なんです”と、同じ顔をしたシスターが二人登場しても、それを信じる自信がある。

（まあ……たまに俺が失言したら本性が出てきてしまう所があるから、それは違うと分かるんだけど）

しかしそんなことを思ってしまうほど、性格が180°も逆転してしまうのだ。

（まるで、天使と悪魔が合わさったような人だよな……しかも天使モードの時はちょっと可愛いと思ってしまうたし）

気だるげな様子で天井を見上げ、目を閉じる。

その時、奥の部屋から小さな足音が聞こえてきた。

しかし、もの思いに耽っている宗也は、その音に気づかないようだ。

足音はだんだんと宗也に近づいていき、彼の後ろで静かに立ち止まった。そして、

「動くな……」

ビクウツ！！と身体を震わせながらも背後を振り向こうとしたが、頭に何か硬い物が押し付けられた。昨夜の恐怖が身を過ぎり、宗也の身体が一瞬で硬くなる。

その様子を背後にいた人物は笑い声をあげた。

「クフフツ、そんなにビビんなよ」

その一声とともに頭に突きつけられていた物の感触がなくなる。

恐る恐る振り向くと、そこには昨夜助けてくれたシスターが、口の端を吊り上げて嘲笑を浮かべていた。

そして、手には先ほどまで宗也に突きつけられていたであろう物が握られていた。

「？」

「なんだ、銃だとも思ったか？ ただの遊びでそんなのを抜くわけがないだろ」

宗也の反応に未だ笑いが押さえられないのか、シスターはクツクツと意地汚く笑う。

そして、礼拝堂を見渡し一言。

「なかなかキレイになってるじゃねえか。けど、テメエの顔を見ると相当大変だったみたいだな」

彼が寝れなかったことなど、最初から分かっているのだろう。彼女はこの教会に泊めてやるとか言いながら、散らかった礼拝堂の掃除を任せて、自分はそそくさと寝室へと引っ込んでしまった。

宗也にどの部屋を使っているのかも言わずに……

「まあ、あれだけ汚かったんだ。最初から分かっていたんだがな」
「……おい」

辛かった片付けを思い出して、シスターを軽く睨みつけた。

「そんなに怒るな。昨夜テメエの命を助けてやったのと、これから警察まで連れて行ってやる報酬の代わりだとも思えばいい」
それを言われてしまったら、宗也とて文句を言い返すことなどできない。

自分の所為でシスターを事件に巻き込んでしまったこと、理由もないのに命まで助けてもらったこと。

さらには警察まで連れて行ってくれるという、ここまでしてくれた彼女に礼を返さないほど、宗也は礼儀知らずではなかった。

「そうゆうことなら別に構わないさ。ところで、今さらなんだけどシスターの名前はなんていうんだ？ 俺の名前は教えたけど、君からはまだ教えてもらってないぞ」

「ハアン？ そうだったか？ まあいいさ、俺の名前は『リナリス・J・フォルスター』」

てんだ。神に仕える敬虔なる使徒。ついでに、美人シスターでもある」

「……とりあえずツツコミ所はたくさんあるけど、あらためてよろしく」

「ああ、もう会うことすらない短い付き合いだと思いがよろしくな」
互いに笑顔で握手をする二人。

苦い笑顔の宗也と、好戦的な笑顔のリナリスという違いはあるが

……

「それでどうする。さっそく警察まで行くか？ テメエの状況を考えたらできるだけ早いほうがいいぞ」

笑顔を消し、神妙な顔になるリナリス。

彼女の言うとおり、逃げるなら早いほうがいい。

いつ外に倒れている黒服たちが起きるのか分からないし、一人逃げた男もまた仲間を引き連れてここに帰ってくるかもしれない。それを踏まえると、やはり彼女の提案を受けるのが一番だろう。

すぐにそこまで考えた宗也は頷いて了解の意思を示した。

「なら外の門の前で待つてな。 車を用意してくるからよう」

そう言った途端、リナリスは立ち上がり教会の外へと歩いていく。宗也もそれを見て、急いで彼女の背中を追った。

一人、門の前で待つこと十数分。

しばらくすると宗也の前に一台の車が止まった。

手動の窓をグルグルと回して開けると、一人の女性が顔を出す。

最初は知らない人だと思い驚いたが、待たせたな、と特徴のある男勝りな声からリナリスだと分かり安堵した。

よく見ると、彼女は、シスター服から私服に着替えたらしい。

細身のジーパンにＴシャツという非常にラフな格好で、女性らしい見た目よりも機能性や動きやすさを選択したようだ。

そのため細いくびれがある腰やスラッとした長い足が強調されている。胸は少し小ぶりのようだが、ピチッとしたＴシャツのせいかな、二つの小山がはっきりと見えてしまい宗也は視線に困ってしまう。

そして、なにより一番目を引いてしまうのは彼女の髪。

緩くウェーブが掛かり、肩の下ほどまで伸びた美しい金髪が、太

陽の光を反射してキラキラと輝いている。

そして、時折吹く風がフワフワと髪を揺らす。

その姿は顔の造形と合わせ絵本に登場するような女神のようで、宗也はボーっと彼女に見惚れてしまった。

「なに突っ立ってんだよ。さっさと乗れソーヤ」

彼女の言葉にハッと目を覚ます。

そして慌てて車の助手席に乗り込む。

それじゃあ行くぜ、とアクセルを踏み込んで教会を後にした。

教会を出発して、今はイギリスの通りをひたすら車で走っている。宗也は日本とは違う街並みを、窓越しから無表情で見つめていた。古い石造りの建物の間、車が一台しか通れないような狭い通りを右往左往しながら進む。まさか道が分からないのか？　とも思ったが、道路に設置されている標識を見るかぎり、一方通行が多いようだ。

母国のように二車線の道が少なく、車のすぐ脇には歩行者やマウンテンバイクが普通に行きかっている。

朝の通勤のためか、道行く人々の動きも何かとスピーディーだ。

そんな中々見ることでできない街の風景がどんどん過ぎ去っていく。

珍しい景色に本当ならテンションも上がるはずなのだが、宗也の表情に変化は見られない。某世界的魔法使いの映画に登場するようなバスや、有名な観光名所の前を通ってもそれは変わらない。

まるで長年イギリスに住んでいて、こんなものいつも見慣れているとでも言うように、淡々と視線は流れる外の景色の一点を凝視しただけだ。

その姿を見かねたのか、

「ソーヤさん、何をそんなに思い悩んでいるのですか？ 先ほどから外の景色を熱心に見ている、というわけではないでしょう」

天使モードになったリナリスが心配するように声をかけた。

その問いに、宗也はようやく反応を示す。そして、ゆつくりとドライバーの方へと向き直り、

「いや、こう……改めて考えてみると何故こんな状況に追い込まれているのか、よく分からなくなつてさ……」

「それは、あなたが事件の現場を目撃してしまったからでしょう。それが理解できないほど難しい疑問ではないと思います」

何を当たり前な、とでも言うような顔をするリナリス。

しかし、世界でもトップレベルに治安の良い日本で生まれ育った宗也は、あのような非現実的な事件に巻き込まれることなど、一度もなかった。

映画や漫画ならば、ドキドキハラハラで済むかもしれないが、それが自分の身に起きるとなると、恐怖や困惑しか思い浮かばない。

殺人事件など、日本でも何度かニュースで報道されるため知ってはいるものの、それはあくまで間接的な知識である。死ぬという可能性が、直接的に自分を襲った場合の相手側の動機など、頭では理解できないのかもしれない。

「それは分かっているさ。けど、今まで自分はおるか、俺の周りの人でも体験したことがない事態になっているんだ。自分で考えてもリナリスに言われたとしても、頭で理解が追いつかないんだ。俺は物語に登場するようなヒーローでもないし、拳銃すらもリアルで見たことがない平和な国の一般市民なんだから」

暗い表情で話す宗也は、まるで呟くような声色だ。

「ハアアアー」

それを聞いて運転中にも関わらず、大きな溜め息を吐いた。

「大人しく聞いていれば、また世の中をナメたようなことを言いますね、ソーヤは。それは、あなたが昨夜まで偶々平和に暮らしてこ

れただけなのです。

この世界にはあなたが想像もできないほどの『悪』が存在しています。昨夜あなたが巻き込まれた事件は、その中のほんの一部にしか過ぎません。

あの男たちの出で立ちを見る限り、おそらく裏に潜んでいるマフィアの下っ端でしょう。あのような者たちを使い、決して表の世界には出てこないような組織もあります。

昨夜のような事件があっても、マフィアを統括している者たちが警察などに捕まることなどありえないと言えます。

なぜなら国の内部や重要機関に深い繋がりを持っている場合が多いからです。彼らは巨大な政府組織が相手であっても、罰することができません」

リナリスは独白を続けるが、宗也が見る彼女の横顔には、何かを思いつめるような強い意志が感じられた。

「けど、あなたはまだ運がいいです。まだ助かる余地が残っているんですから」

「そっか……これでもまだ運がいいのか。今さうだけど、本当にありがとう、知り合いでもない俺を助けてくれて」

宗也の顔は、先ほどまでの暗い顔とは違い、少しだけ表情が軽くなったようだ。

心から感謝の言葉を聞いたりナリスは、人を平気で銃で撃つていたと思えないくらい、聖母のような暖かい笑顔を浮かべた。

「それはそれとして、他にも分からないことがあるんだが聞いてもいいか？」

「まだあるのですか？ この際なので、聞きたいことがあるのですしたらどうぞ」

少し心に余裕が生まれた宗也は、今まで疑問を持っていたことを暴露する。

「非常に聞きにくいんだが……怒るなよ？」

「何を言いよどんでいるのですか？ 私が答えられることなら、あ

る程度はお話いたします」

齒切れの悪い口ぶりに、少々苛立つような声。

「それじゃあ……リナリスの口調、いやもう性格と言い換えてもいい。なんでそんな二重人格みたいに変わるんだ？」

そう。

彼女の劇的なまでの性格の変化。

それはまるで二重人格であるかのような。

(……………)

しばらく黙り込むリナリス。そして、

「そうですね。あまりお話したくはない内容なのですが、別にいいでしょう。あなたの質問に簡単にお答えするならば、キャラ付け(・・・・)ですかね」

「はっ？」

あまりの突飛な返答に口をポカンとあける。

「あなたが凶悪シスターモードと仰っていた方が、私のそもそもの性格です。しかし、そのキャラでは、シスターなんて神に仕える者には似つかわしくないでしょう？」

「聞かれても困るんだけど、まあ普通のシスターのイメージ的には優しいとか穏やかかっていうイメージが大きいよな」

「そうです、そこで考えました。元々は殺し屋の私としても、今は敬虔なる神の使徒なので、一応はそれらしくしようと」

「ハイちよつと待った！　今、サラツと無視できないセリフがあったー！」

予想すらできなかった発言に、今まで落ち込んでいた心をすべて忘れてしまうくらいの衝撃を受ける。

「話の腰を折らないでください」

無然とした表情で宗也のツツコミを切り捨てた。

納得はいかない宗也であったが、とりあえず話をすべて聞こうと

彼女の言葉に再び耳を傾ける。

「つまりですね。シスターとして相対するときは、優しく包み込むような天使のようなキャラを心がけるようにしています。たまに我慢できなくて、素が出てしまうのが心残りではありますが」

「我慢できてないって……結構な頻度であったと思うけどな」

「アア？」

「……申し訳ございません」

やはり恐ろしかった。

「ふふっ、よろしい。謝罪は大切ですからね」

その後も、二人で他愛も無い会話を続けていく。

やはり殺し屋というセリフが気になるので聞いてみると、誤魔化されたり、結局睨まれたりして黙るしかなくなったのだが、最初とは違い、楽しそうな雰囲気の流れていく。

それは初めて出会ったのかと思えるくらい気楽で、心地よい感覚があった。

首都ロンドン

ロンドン市内には複数の警察が存在している。

一つはロンドン市警察。

ここは、ロンドン市内にあるシティ・オブ・ロンドンと呼ばれる地区を管轄している組織である。ビショップスゲート、スノーヒル、ウッドストリートに三つの警察署を擁し、多くの警察官及び職員が働き、市内の安全を守っている。

二つ目は、ロンドン警視庁。

ロンドン市内のグレーター・ロンドンを管轄する組織である。ニュー・スコットランドヤードを本部として、地元民には警視庁のこ

とを、単にスコットランドヤードと呼ばれることが多い。なおグレイター・ロンドンとはシティ・オブ・ロンドンとシティ・オブ・ウエストミンスターに31のロンドン特別区を加えた範囲を領域としている。

他にもイギリス鉄道警察や国防省警察、非常に小規模ではあるが公園警察と呼ばれる組織まで、多種多様な警察が活動する。

その中で、二人がたどり着いたのはロンドン警視庁であるスコットランドヤード。

警視庁の敷地内には入らず、向かいの通りに静かに車を寄せた。

「さあ、着きましたよ。一応、私は前科持ちなので、お連れすることができるのはここまでです。中に入ってあなたの事情を説明すれば、後は警察が保護してくれるでしょう」

またツツコミたいところであつたが、どうせまた言っても意味はないと苦笑し、半ば諦めて車のドアを開け、外に出る。

そのまま振り返り、リナリスに深く頭を下げた。

「本当にありがとう。君がいなかったら、今ごろはどうなっていたか分からない。何かお返ししたいところだけど、荷物もすべて宿に置いてきてしまっているから、何もできないんだ。日本人として頭を下げることもくらいしか……」

「気にしなくて結構ですよ。そうやって、感謝してもらえただけでこれでもシスターなのですから、無償の愛を与えることは、私にとって喜びでもあるので」

言いながら、小さくウインクをする。

宗也の誠心誠意の感謝の言葉に対して、リナリスのおどけたようなその仕草は、暗くなりそうだった雰囲気を消しさつた。

その気遣いをありがたく思いながらも、もう一度彼女に深く感謝を伝え、警視庁へと足を向ける。後ろからは、元気であ、と、やはりシスターとは思えない口調で手を上げているシスターの姿があつた。

ロンドン警視庁にて

宗也はリナリスと別れ、ロンドン警視庁の中へと入った。

辺りを見渡してみるが、日本でも警察にご厄介になったことはない宗也だ。このような時、どのようにすればいいのかなど分らない。キヨロキヨロと落ち着きなく視線をさ迷わせていると、一人の警察官が声をかけてきた。

「ヘイ、ボーイ。何かここに用があるのか？」

おそらく年齢は三十代後半くらいだろうか。制服を違和感なく着込み、彼の腕は、まるで丸太のように大きく盛り上がっていた。

しかし、その鍛えぬかれたような攻撃的な身体に反して、彼の顔にはシニカルな笑顔が浮かび、気のいいオツチャン然とした雰囲気 が漂っている。

最初は驚いた宗也であったが、親切にも自分に声をかけてくれた彼に自分の状況を説明した。

「俺は、日本から旅行に來た宇佐美宗也（つみみすけ）と言います。ここに來たのは……」

と言いかけたところで、

「何だ、日本人か？ どうした、また金を掏すられたか、パスポートでも無くしたのか。それならあっちにある受付に行きな。クレジットカードとかパスポートの問題なら、そこの婦警がどうすればいいのか教えてくれる」

話を最後まで聞かない、目の前の警察官。

やはり日本人は絶好のカモと思われるでいて、掏りや盗難などの小犯罪に巻き込まれやすいのだろうか。少し面倒くさそうに案内された。

しかし、宗也に起こった事件はそんなものではない。もしかしたら自分の命まで危ういかもしれない状況である。

宗也は、話を終えたとばかりに背を向けて去ろうとする警察官

を、慌てて呼び止めた。

「ちよつと待つてください！ 昨夜から怪しい人たちに追われているんです。だから警察に助けてほしいんです！！」

その言葉に怪しげな表情を浮かべながらも、仕事柄仕方がないのか、詳しく話を聞こうと奥の部屋へと連れられていった。

待合室のような部屋へと通され、担当の者を連れてくると言い残し、警察官は一人部屋から出て行く。

しばらく待っていると、先ほどの警察官とともに、年配の男が部屋へと入ってきた。

「君がポルガ君の言っていた日本人か」

壮年の薄汚れた背広を羽織った男性が、宗也の前へと進み出る。

「はじめまして。私の名前は、バーンズ・クラブトンという。君はソーヤ君でよかったね？」

「はい、宗也で大丈夫です」

スツと手を差し出され、握手を求められる。

純日本人としては、握手という作法が珍しいもので少し萎縮してしまつたが、無視するのも失礼にあたると思い、はじめましてと彼の手を握り返した。

それにバーンズは満足したようで、部屋の真ん中あたりに置かれている椅子を指差し、そこで話を聞いてもいいか、と問いかける。

宗也はそれに対して、はい、と頷いた。

「それでは聞こうか。ポルガ君が言うには、君は誰かに追われているそうだな。間違いではないかね？」

「はい、間違いないです」

バーンズは椅子に深く腰掛け、フムと何度か相槌をうつ。そして、

「それでは詳しく話を聞こうじゃないか。嘘偽りなく、私と彼に君の状況をすべて教えてくれ」

宗也は深く頷き、ゆっくりと昨夜の路上で行われていた事件や、その犯人である黒服たちのことを伝えていった。

その間、二人は一言も声を発しない。一先ず話し終えるのを、ただ黙って聞いているようだ。

そのまま一通り話し終わると、バーンズは目を細め宗也を凝視する。それは何かを疑っているような、怒っているような視線だ。「……ソーヤ君。私はすべて教えてくれと、最初に言っておいたはずだが。君の話はどうも大事なところが足りないような気がするのだよ」

その言葉に、ビクリと身体を震わせる。

「例えば……君は、その黒服を着た男たちからどう逃げ延びたんだね？ 一晩中走り回ってここにたどり着いたわけでもないんだろう。その事件があつたという通りからこの警察署まではかなりの距離がある。そんな大層なことが起こったというのに、道も場所も分からない観光客がここまで安全に来られるなんて、出来すぎじゃないかな？」

バーンズは机の上で両手を組み顎を乗せて、“どうだい？”とでも言うように見つめてくる。

「それは、タクシーで」

「タクシーで逃げてきたとか言うなよ？ 一応、そういうことがあつたのなら、ドライバーから警察の方に連絡が送られるシステムになっているんだよ。もちろん、昨夜からそのような報告は受けていない。となると、君は私にすべてを話していないにも関わらず、嘘までついたことになるな」

宗也の答えを無視して、問い詰めるバーンズ。そして後ろの壁には、最初に出会ったポルガと呼ばれた警官が、腕を組んで寄りかかっている。まるで、これまでの一連の会話に興味すらないかのよう。

そんな二人を意識しながらも、宗也はバーンズの言うとおり、彼らに事のすべてを伝えたわけではなかった。

それには宗也なりの理由と訳がある。

そう、彼に嘘をついてまで隠そうとした話とは、リナリスのこ

とである。彼女は非殺傷とはいえ拳銃を平然と撃っていたり、自らの口から前科持ちですなんて言っていたのだが、彼女には命を助けてもらったという大恩がある。それなのに、告げ口をするなんて酷いことしたくはないと考えていたのだ。

しかし、そのような理由など警察にはなんの関係はない。彼らにしてみれば、事件をできるだけ詳しく、そして真実を追究して市民の安全を守るのが職務と言えるのだから。

追い詰められた宗也は、下を向いてどうすればいい、とでも考えているようで、途端に無口になってしまう。

そんな姿を見て、バーンズは溜め息を一つ。

「別に悩む必要などないと思うんだがね。ソーヤ君の話を聞く限り、何も悪いことはしていないのだろう？ それならば、そうやって悩むことも落ち込むこともない。あったことを正確に話せば、こちらとしてもスムーズに事を進ませることができるし、君の安全も絶対のものになるんだ。この状況で、何をそんなに躊躇う必要がある」

とあるフレーズを強調するような言い回し。

やはり、このあたりは長年の経験なのだろうか。まるでこちらを安心させ、秘密を探り出そうとしているような感じがする。もしくはは忠告なのか。今ここですべてを話さないと、警察は君を保護などしないという。

(……どこまでもツイていない)

リナリスのことを話さなければ、自分は保護などしてもらえない。けど話してしまえば、無償で助けてくれた彼女の好意を無碍にしてしまう。

本当にどうすればいいのか……自分の心の中に生まれた葛藤が、身体全体を蝕んでいるようだ。

八方塞なこの状況の中、パンツと勢いよくドアが開かれ、二人の男が押し入ってきた。

「特別警察だ。ここに日本人と思われる青年がいると報告があった」
突如現れた二人は自らを“特別警察”と言い、胸元にあるポケ

ツトからバッジのような物を取り出して、バーンズとポルガに見せた。

「昨夜、サウス・ミンスター通りで殺人事件があった。被害者は中年の男性で、詳しい身元は今調べているところだ。その事件の重要参考人として、そこにいる日本人を拘束したい」

あまりの突然の事態に、何を言っているのか理解できない宗也。それは、今まで話していたバーンズも同じようだ。

「少し待ってもらえないかな？ 拘束ということは、そこにいる彼が、その事件の犯人であるとも考えているのかい？」

バーンズの質問に頷きをもって返す二人。

「昨夜の現場で目撃者がいたようだ。その人物が言うには黒髪・黒目の比較的若い顔つきをしたアジア系の男だと。そう、まるでそこにいる彼のような」

言いながら、宗也の顔をじつくりと見回す。

その視線に耐え切れず、スツと目を逸らしてしまう。

「とりあえず手錠を掛けさせてさせてもらうが、抵抗はするな」

「突然すぎではないかな？ 昨日今日の事件で、こうも早く犯人が特定できるわけもない。しかもその程度の証言で、彼を犯人にするのは早計すぎるのではないか？」

怪しすぎる彼らの行動に、バーンズは宗也への行き道を塞ぐ。

「あなたにはすでに関係のない話だ。このように令状も発行されている。これからはこの事件、私たち特別警察が引き継ぐ手筈となっている」

ひったくるように令状を受け取り、しっかりと確認するが、それは間違いなく本物のようだ。

バーンズは諦めたように小さく肩を落とし、わかった、と言って道を譲る。さすがの警察官であっても、公的な文書をひっさげた男たちを止めることはできないのだ。

その姿に満足したのか、ニヤリとした笑みを浮かべ、堂々とした足取りで宗也の下へと歩み寄る男たち。そして目と鼻の先で立ち

止り、ポケットから手錠を取り出すと、有無を言わせぬスピードで、宗也の両手を拘束した。

その光景を、すぐには認識できない宗也。

しかし手錠を掛けた男の、行くぞ、という言葉でハッと我に返る。

「ちょ、ちよつと待つてください。何がどうなっているか、まったく理解できないんですが！ 確かに昨夜、殺人現場を見てしまったけど、犯人は俺じゃないです！！」

「今、お前の話を聞く気はない。この建物の前に、車を待機させてある。まずはそれに乗って移動してもらおう」

掛けられた手錠が引かれる。その力の所為で、身体がフラツとよろけてしまいが、それでも強引に連れられ、部屋からも連れ出されてしまう。

最後の頼みである警察官の二人に向けて、助けてくれ、とでも言うような怯えた視線を送ってみるが、その先には、

後姿を、苦虫を噛み潰した表情で見送るバーズ。

未だ壁際に寄りかかり、やっと面倒くさいことが終わった、とでも思っているような表情のポルガ。

二人の考えていることはまったく違うみたいだが、どちらもこの状況を覆せそうにはないみたいだ。

ドナドナのように、静かに連行される宗也。

その顔はすでに諦めかけているようだ。

逃げ出したいと思うのは当然だが、先ほどから挟み込むように歩く男たちの胸元には、やはり無骨な拳銃が携えられている。歩くたびに、内側にあるホルスターに入ったその拳銃がチラチラと見え隠れしていた。

そして、警視庁の門前に止まっていた車の、後部座席に押し込まれる。そのままドルンという独特な低いエンジン音をかき鳴らし、三人を乗せた車は発進していった。

警視庁前の通り――

リナリスは宗也を送り届けた後、タバコに火をつけて一服していた。車の中には、ユラユラと揺れる紫煙が漂い、灰皿にはたくさん吸殻が乱雑に捨てられている。まさかこんな女性がシスターであるなど、誰が想像できるだろうか。

リナリスはタバコを吸い終わると、全体が真っ黒で三文字のローマ字が描かれている箱から、再び一本取り出して、オイル式のライターで火をつけた。

もうここに来てから二十分以上過ぎているだろう。宗也が中に入ってから結構な時間が経っている。

本当ならば、こんなところで長居したくはない。しかし、リナリスの視線は、ずっと警視庁の門前に向けられている。

その様相はまるで、何かを待っているようだ。

さらに十分ほど時間が過ぎたその時、この場に相応しくない黒塗りの車が一台、門の前で停車した。中には、二人の男が乗っている。彼らはそのまま車から下りて、少し会話を交えた後、警視庁の中へと消えていった。

その姿を、鋭い目つきで追うリナリス。

しばらくすると、中から先ほどの男たちと、見覚えのある青年が出てくる。両脇を固められ、手には手錠が掛けられているようだ。それを見て、口の端を吊り上げるような凄惨な笑みを浮かべて吸っていたタバコを噛みちぎる。そして、

「ハッ……ビンゴだぜえ」

と、吐き捨てるような一声。

そのまま、青年と男たちが車に乗って走り出すと、リナリスも同様にエンジンをかけて、彼らを追いかけるように走り出した。

宗也は手錠をされた手をじっと見つめ、無言で座席に座っている。

男たちも何も話さないため、車内には一切の会話もない。

しかし、車はそんなこと関係ないとも言つかのように進んでいく。

今はロンドン市内にある警視庁からドンドン離れ、近代的な建物も高い石造りの街並みも、次第に無くなり、閑散とした雰囲気^{まは}が辺りを漂っている。

他の車も疎^{まは}らには走ってはいるが、やはり中心街に比べると圧倒的に数が少ない。

その道中、無言で下を向いている宗也であったが、やはり不安なようで、勇気をもって隣の男に話しかけてみた。

「あの……どこに向かっているんですか？」

その質問に、男は今まで黙っていた口を開いた。

「これから向かう場所は、特別警察の収容所だ」

短い返答だったが、何故そこに行かなければならないのか理解できない宗也は、再び尋ねた。

「収容所って……俺は日本人なんで、いきなり拘束できないはずだと思うんですが」

「確かに引渡し協定を結んでいない国の場合、犯罪者は母国に送還せねばならないが、何もすぐというわけではない。まさか罪を犯した外国人を、送還するまでホテルにでも泊まらせるなどありえないだろう？ だから一時的に収容する施設に、お前を連行することになっている」

なるほど、と一瞬思ってしまったが、当然、彼の発言には納得

できない。

「その前に、俺は犯罪者じゃあないんですが……さっきの警察の人に一通り説明してあるので、話を聞いてもらえれば分かるはずですよ」もちろん、宗也の言っていることは真実であるのだが、彼らはそれを信用しなかった。

「その話は、後でこちらでから聞かせてもらおう。……そろそろ大丈夫か？」

反論を一言で終わらされ、ドライバーに何かを確認しているようだ。その問いに、運転しながらも車の周りを確認したドライバーが、ああ、と短く返す。

宗也も気になって周りを確認してみれば、かなり遠くまで来たのだろうか。そこは人も建物もない、閑散とした荒野が広がっていた。

そこに車を停車させ、降りろ！ と、乱暴に車から押し出される。

降り立ったのは、ウエスタン映画の舞台にでもなっているような場所。さすがにカウボーイや酒場はないが、日本にはない特別な風景に、しばし状況を忘れ圧倒されてしまった。

しかしよく見回すと、彼らが言っていたような収容所らしきものは見当たらない。それどころか、人工物の気配すらないようだ。（まさか、秘密基地みたいに地下に隠しているとか言わないよな？）疑問を感じながらも、二人を振り返る。

その瞬間、宗也は驚愕の表情をして目を見開いた。

視線の先には、拳銃を手に持ち、銃口を宗也へと向けている男の姿。

その男とは、ここまで連行してきた特別警察の男であった。

男は銃口を向けたまま、口を開く。

「お前もツイてないな。まさか、あの現場を目撃しちゃうなんて……お陰でここで死ななくちゃならねえ」

その突然の行動とセリフに、未だに脳の整理が追いつかない。

それを見て思ったのか、

「何が起きたのか理解できないって顔してるな。まあ、それも分かんなくもない。ただ、お前はここで死ぬ、それだけだ。一応、最後の言葉くらいなら聴いてやつてもいいが、どうする？」

それを聞いても、宗也の身体は硬直したまま動かない。それでも何とか口だけは動かすことができた。

「ど、どうということなんだ？　なんで、銃を俺に向けているんだよちゃんと説明しろよ！！」

あらん限りの大声で怒鳴り上げる。

男はそれを面倒そうに見るが、仕方ないとも言つように話し出す。

「お前は見てはならないものを見た。理由としてはそれだけだ」

「そんな理由で納得できるわけないだろ！？　それにお前ら警官じゃないのかよ！！」

「いや、警官なのは本当だ。ただ……裏の世界に繋がりがあつてだけだ。昨夜の事件、あれは単純な殺人じゃあなくてな。お前にも分かるように簡単にまとめると、組織の裏切り者を追い詰めて、始末していたらしい。それをお前が目撃しちまつたつていうだけの話だ。どうだ、理解できたか？」

「だからって、どうして俺まで殺そうとするんだ！　俺はお前らと関係ないだろうが！！」

宗也は必死に弁解を試みる。しかし、

「残念ながら、すでに見ちまつたことが問題だな。裏組織と呼ばれるものは、なんの例外なく秘匿されているものだ。しかし、それが少しでも明るみになる事態になったらどうする？　そう、口封じさ。実際にお前はそこまで知らなかったろうが、少しでも露見する可能性のあるお前を放っておけないから殺せという、上の方からの命令だ」

そんなどうしようもない理由に愕然とし、膝を地面についてしまふ。

宗也の崩れ落ちた姿を見た男は、ゆつくりと近づき、拳銃を構えた。

「話はこれで終わりだ。次はお前を助けたっていうシスターを始末しなくちゃならない。最後の言葉にしちゃあ随分と長かったが、満足しただろ？」

握る拳銃に力が入り、宗也の頭に押し付けられる。

「それじゃあ……サヨナラだ」

その場に一発の激しい銃声が鳴り響いた。

ロンドン警視庁にて（後書き）

リナリスが路上でタバコを吸っているシーンがありますが、すでに公共の場はもちろんのことレストランやカフェでも禁煙になっています。罰金も相当な値段を取られます。

ちなみに、吸っている銘柄はJ・O・S。もしくは、J・P・Oです。

再会と真相

荒野に一発の激しい銃声が鳴り響いた。

途端に、宗也の頭に押し付けられていた拳銃の感触がなくなる。

閉じていた目を恐る恐る開くと、先ほどまで目の前に立っていた男がぐったりと倒れていた。

予想していなかった展開に、車に乗っていたもう一人の仲間の顔も驚愕を露わにしている。

その時、遠くから爆音を鳴り響いせ、一台の車が猛スピードで向かってきた。

死の緊張から開放された宗也は、ぼんやりとした表情でその車を見つめている。やがてだんだんと大きくなるシルエット。そして、ドライバーがはつきりと視認できる距離まで爆走してきたころ、宗也の目は大きく開かれる。

それは見覚えのある顔。

緩くウェーブのかかった金髪と、女神のように整った顔立ちの女性。

しかし、そんな顔立ちをすべて台無しにするかのような、猛禽類のような凶悪な笑み。

リナリス・J・フォルスターだ。

バオオン！！ という轟音が、寂れた荒野に響きわたった。

地面が剥き出しになっている道を、ガタガタと激しく揺れながら最高速度で駆けぬける。

（ギリギリ間に合ったか）

視界に宗也が入ったときには、すでに拳銃を向けられ、いつ撃たれてもおかしくない状況だった。

その光景が見えたとき、愛用のS & a m p ; W M 5 0 0 を窓か

ら突き出ようにして発砲。

放たれた弾丸は空気を切り裂くように飛び、宗也の頭に銃を押し付けている男に見事命中した。

それと同時に、男は足の力がなくなったかのように、崩れ落ちるようになて倒れこむ。

リナリスは神技的な射撃を成功させても、喜ぶようなマネなどしない。まだ一人車の中に残っているからだ。

リナリスはさらにアクセルペダルを力強く踏み抜き、土煙を激しく立ち昇らせる。

そして逃げようとしている車に向かって再び銃を乱射した。

仲間がやられたことによる放心状態から、ようやく抜け出したもう一人の男。

バックミラーを確認すれば、こちらに向かって爆走してくる車がいることに気づく。顔をよく見ると、運転しているのは組織から抹殺命令を受けている女だ。

報告によれば、昨夜あの女は一人で組織のエージェントを昏倒させるほどの実力者らしい。組織の下っ端とはいえ、拳銃を所持した複数の男を、一般市民が撃退できるようなものではない。

それはある意味、ヤツが裏の人間であるという証明だ。無様に倒れている仲間と、その数瞬間に聞こえた銃声。

おそらく、それもヤツの仕業なのだろう。

あれほどの距離から運転しながら見事に命中させる腕は、プロと比べてもまったく遜色ない。

このままあの女と戦闘しても、自分の腕では到底敵わないだろう。俺は、仮にも裏の世界で関わってきた人間だ。それぐらいのこと

が理解できないようなら、とつくの昔に命を落としている。

そこまですぐ瞬時に考え、男が選択した行動とは、逃げることに。

キーを回し、急いで逃げようとする。しかし焦りのためか、中々エンジンがかからない。その瞬間にもヤツは猛スピードで近づいており、いつ発砲されるのか分かったものではない。

焦りで震える手をなんとか押さえつけ、ドォルンという音ともによりやくエンジンがかかる。

そのまま一気にギアをマックスに入れて走り出した。

おそらくヤツはあの日本人を助けるためにきたのだろう。それならば、あいつを餌に置いておけばコチラは後回しになるはず。

そう考えながら、できうるかぎりの力でアクセルを踏みしめ、この場を離脱しようとする。

しかし、それは甘い空想だった。

ヤツはかなりの距離からの射撃を成功させるほどの実力者。

あの女にとって走り去る車とは、人に比べたらただの大きいもののだと。

それを履き違えてしまった。

かなりのスピードに乗った車。

おそらく男は安心していただであらう。これなら逃げ切れると。

しかしその瞬間、突然と小さな違和感が身体を駆け巡る。それを感じたコンマ一秒の間に大きな浮遊感を感じる。

瞬間、障害受けたことのないほどの衝撃が、身体に襲いかかった。その事態を何も理解することもなく視界が暗転し、男の意識は雄叫びとともに闇に沈んでいった。

目線の先には、上下が逆さまになっている車。シューッと煙を上

げながら、ただただ沈黙している。

その光景を呆然と見つめる宗也。

これまで、瞬く間に変化する状況に頭がまったく付いていかない。殺される！！と感じた時には、目の前の男が突然地面に倒れふし、助かったと思ったら見覚えのある車が、猛烈なスピードで爆走してくるのだ。

それを見て、慌てながら逃げ出すもう一人の男。

しかし、後ろから複数の銃声が聞こえたと思ったら、走り去った車がいきなり激しく横転した。

そのスタントばりに啞然としながらも、ヨタヨタとおじいさんのように立ち上がる。

その時、前とは違うゆっくりとした速度で宗也の横で立ち止まる一台の車。車内には、警視庁で別れるまで一緒にいたリナリスが乗っている。彼女はニタニタとした笑みで、窓から身を乗り出すように顔を出した。

「よう、さっきぶりだなあ。そんなアホみたいにボーっとして……どうした？」

ケタケタと人を小馬鹿にしたような口調。

未だに状況がほとんど分からなかったが、目の前にいる彼女が、またも自分を助けてくれたことだけはなんとなく理解できる。

宗也は焦ったような声で、

「ど、どうしてリナリスがここにいるんだ。俺とはもう会うことはないって言ってなかったか？」

その第一声に一層笑みを深くする。

「どうしてって……お前を警視庁に送ってから、ずっと門の前で見張ってたからなあ。ソーヤが手錠されながら出てきたときなんか、かなり笑わせてもらったぜ」

「いや、だからなんて見張ってたんだよ……」

なかなか噛み合わない会話にリナリスを軽く睨みつけたが、そんなものどこ吹く風とでも言うような表情。

「まあ、詳しい話はここから移動しながらだな。他にあいつらの仲間が来ないとも限らねえから、さっさと乗れ」

そう言つて、親指で助手席を指す。

宗也自信また狙われるのは勘弁だったので、そこは素直に車に乗り込んだ。

ドアを閉め、シートベルトをしっかり締めたのを確認すると、それじゃあ行くぜ、とその場から走り出した。

再びリナリスの車に乗った宗也は、もう一度質問を繰り返した。

「で？ 同じことを聞くが、どうしてリナリスここにいるんだ？」

先ほど疑問を流されたことに、少し不満顔だ。

「そんなことより“また助けてくれたありがとう”って、最初に言うべきじゃねえのか？」

すでに宗也は彼女に二回も命を救われた身だ。確かに、ここは感謝の言葉を先に言うべきなのは間違いない。

「……悪かったよ。リナリス、俺を助けてくれてありがとう」

その言葉に満足したようで、どおいたしまして、と返事を返した。その後、リナリスがどうしてここにいたのかの話を詳しく聞かされる。

「まず、説明しなくちゃならねえのは、ソーヤはただの罔だったってことだな」

その齒に衣を着せぬセリフに、宗也は顔を僅かにしかめるが、彼女は話し続ける。

「昨夜に襲ってきた奴らはバカだったが、おそらくどこかのマフィアの人間だろうさ。殺す現場を見られて、逃げた一人以外は撃退されちまったんだから、また襲いかかってくるなんてこたあサルでも分かるよな？」

宗也はそれに頷いて答える。

「仮にも奴らは組織だってたんだ。もしかしたら、バックにいるの

はかなりの大物かもしれない。そうだった場合を考えて、お前を警察に連れてった」

まさかそんな危険なやつらだったとは露とも思わなかったので、改めて彼女に聞かされると、さらなる恐怖に身体が震える。

しかし、そこまでしつかり考えて警察まで連れて行ってくれたりナリスには、感謝の念を送っておいた。彼女にはつきり“囧”だと言われたことも忘れて。

「けど、それだけ大きい組織だった場合、警察にいても安全じゃない」

リナリスの好意に感謝していたのも束の間、リナリスのその言葉に、んん？ と違和感を覚える。話はさらに続けられ、

「最初に言ったとおりただのゴロツキだったら、保護されて日本に返されるだけだったろうから問題ねえが、本物のマフィアだったらなにかしらの手を使って、お前を抹殺しようする。案の定、警視庁の前で見張ってたなら、怪しい奴等がノコノコと現れるじゃねえか」
「ちょ、ちよつと待て。それじゃあ、あれか！？ 俺はそいつらをおびき寄せるための餌だったのか！？」

「だから最初に言っただろう？ お前はただの囧だったって」

リナリスはさも当然のような顔をするが、直接的にお前は囧だの餌だのと言われて気分を害さない人間などいないだろう。

あまりの真実に怒りを露わにした宗也は、声をさらに荒げた。

「じゃあ昨日の夜に俺を助けてくれるって言ったのはなんだったんだよ！！」

「ん？ …… ああ、その話か。俺はどっちでも良かったんだよ。あのまま教会にいて奴等が襲い掛かってこようが、お前を警察に送って襲ってくるのを待ってようが。どちらかと言えば、また教会の中を荒らされた分、今の方がマシだがな」

宗也の怒りを無視するかのように、淡々と返答する。

「なんだそれ！？ お前せいで俺は、もう少して死ぬ寸前だったんだぞ！！」

魂から響かせるように絶叫する。

それに対してリナリスは一瞬だけ顔をしかめて、
「最後には助けてやったんだから、別にいいだろうが……それに俺がいなかったらお前はほぼ100%死んでたんだ。俺がお前を利用しようがしなかるうがそれは変わらねえ。」

彼女の言うことは、この興奮した頭でも理解はできる。

しかし、それを納得できるかと問われたら否だ。

確かに教会には行かず、自分一人だけで逃げきれたとしても、警察に行こうとするのは決まっている。そこで、先の二人みたいなマフィアと繋がりがあある男たちにホイホイと連いて行ったら、まず殺されてしまうのは確実だろう。

感情では、自分を囷などにした凶悪シスターなど到底許せないが、彼女に出会わなかった未来を想像するとバッドエンド以外思い浮かばないのだ。なので、あの二人から助けてくれたリナリスを怒る資格など、宗也は少しも持ち合わせていないのだ。

この板ばさみのような感情に、宗也は押し黙ることしかできない。リナリスはそんな感情を知ってか知らずか、少しクシャクシャになったタバコの箱を取り出して、宗也の前に差し出す。

「こんな時は、とりあえず一服するのにかぎるぜ。お前もいい年齢なんだから吸えるだろ？」

一本だけ箱から伸びているタバコを抜き取り、口に咥^{くわ}える。
隣からシュボツという音ともにジッポで火を点けられた。

そして一息だけ吸ったところ、

「ゲホッ！ ゲホッ！！」

思い切りむせた。

「ハアン？ なにやってんだよ、お前。もしかしてタバコも吸えねえオコチャマなのか？」

未だに激しく咳き込んでいる姿を見て、信じられねえ、とでも言いたそうな表情。

「ケホッ……し、仕方ないだろ？ 今までタバコとは無縁の生活を

してたんだから」

そう言い訳する顔は、苦悶に満ちていて非常に辛そうだ。

「そいつはいけねえなあ。タバコを吸えないなんてお前、人生の半分は損してんぞ？ こいつを機に味をしっかり覚えとけ」

そのセリフはまるで悪魔が人を騙し、悪の道へと誘うかのよう。

実際、その通りなのだが……

タバコを吸ってしまったおかげで、今は気分が悪い、とシートを倒して横になっっている。やはり初めての喫煙はきついものがあるのか、クラクラと揺れる頭の上に手の甲を乗せてぐったりとしている。そんな状態に関係なく、車はガタガタと揺れながら突き進む。その振動は体調の悪い身体を余計に悪化させ、大きく弾むたびにウウツと小さなうめき声を漏らしていた。

周りの風景は寂れた荒野から移り変わり、今は都会とは口が裂けても言えない街の中を走っている。キレイな小川が流れる橋を渡り、敷地の広い家々が立ち並ぶ住宅街を通り抜ける。

しばらく平坦な道をまっすぐ進んでいると、だんだんと緩やかな勾配にさしかかった。その先は小さな丘のようになっていて、頂上付近には平屋の家がポツンと建っている。

リナリスは丘を登るためにペダルをグイッと強く踏み込んだ。どうやらこの車が目指しているのはあの家のように、奥には木々が生い茂る森があるだけだ。

家に到着すると、

「おい、着いたぞソーヤ。寝てないでさっさと起きろ」

バシツと頭を叩かれ驚いて目を覚ます宗也。

叩かれた頭は痛い、今まで休んでいたため体調の方はすっかり回復しているみたいだ。

キョロキョロと辺りを見回してみると一軒の家が目に入った。特にこれといった特徴もない、このあたりでは珍しくもないレンガ式

の造り。

どうやら車は目的地に着いたようで、車庫もない更地に無造作に止まっている。

「教会に帰るんじゃないかったのか？」

まだ寝ぼけているのか、声に覇気がまったくない。

「何バカなこと言ってるんだ。協会も奴等に場所を知られてるんだぜ？ そんなところに戻れるわけねえだろうが……」

それくらい分かれ、トリナリスは頭を抱える。

「んじゃあ、ここはどこだ？ お前の隠れ家みたいな場所か？？」

「違え。この家はなあ、ロンドンの中でもトップクラスの変人が住んでる場所だ」

その返答にさらなる疑問を感じる。

（変人……そんなところに用なんてあるのか？）

考えてもまったく分からないが、この凶悪シスターに変人と言えるほどの。また個性の強い、イカれた人物じゃないように、と静かに祈りを捧げた。

「あんまり会いたい女じゃねえんだが、この状況じゃあ仕方ねえ」

どうやらその変人というのは女性らしい。

行くぞという一声により、ボーっとした思考していた状態から慌てて立ち直った。二人はそろって車から降りて玄関へと向かっていく。

玄関の前に着くが、呼び鈴らしきものは見当たらない。

しかしそんなこと最初から分かっていたのだろう。

リナリスがドアの前に立つと、突然そのドアを蹴破った。

「はあああ！？ なにやってんの、お前！ それ器物破損だろうが！！」

まさかの犯罪を信じられない宗也は、すぐにリナリスを止めに入る。

「なにすんだよ。どうせ呼んでも居留守使って出てこない引きこもりだぞ？ それに俺たちが来たことなんて、この街に入った時から

とつくに気づいてるんだよ」

どうやらここに住んでるのはとんでもない出不精な人みたいだ。
最後の言葉の意味は分からなかったが、きつとこの家の住人とリナリスは、こんなこと問題ないくらい仲の良い間柄なんだろうと無理やり納得して、彼女の拘束を解こうとする。

しかし、そうする前に、

「なあ……聞くが、テメエどこ触ってんだ？」

自分が触っている箇所がどこだか分かった途端、顔を青くして急いで手を離す。

「す、すいませんでしたー！！ 別にわざととかじゃないんです！　そう、アレなんです。不慮の事故みたい……」

「なんでもいい……その手を俺の胸からさっさとどける。じゃねえと、テメエの頭を吹き飛ばすぞ」

「ヒイイイ!？」

絶対零度の視線に、身体全体が震えだす。その寒気は、まだ南極か北極で素っ裸でいる方がマシだと思えるくらいだ。

次はねえからな、という最後の宣告を受けた後、身体の硬直が解けた宗也は心臓をドキドキとさせながらリナリスの背後についていく。

無論、恐怖のドキドキであるのは言うまでも無い。

家に入るとそこは普通と言ってもいい内装だったが、なにか違和感のようなものを感じる。

リビングにはテーブルやソファーなどの家具が並んでおり、ただの一般家庭と遜色ないように見えるのだが何かが足りない。

よく周りを見ると、その違和感がなんだったのか気づいた。

「そうか……。ここには家電製品がほとんどないんだ」

普通の家庭ならば、テレビやパソコンなどがあってもおかしくない。しかし、ここにはそれどころか電化製品を使うためのコンセントやコードまで見当たらないのだ。

「ものすごく機械が嫌いなアナログ人間とか？」

生涯で一番かもしれないほど絶叫した。

新たな出会い

予想もしなかった出来事に、悲鳴のような大声を上げてしまった宗也。

目前には、先ほどまで存在の臭いすら感じさせなかった、地下への階段が顔を出している。

隣に不機嫌に立っているリナリスはこのギミックを知っていたらしく、特に驚きを感じていないみたいだ。開かれた階段を見て、始めからそオすりゃいいんだよ……、と嘆息していることから分かる。

口をボケーッと開いたまま、呆然としている宗也の背を押すように、そのまま階段を下りていく。

グルグルと回りながら下りているということは、造りが螺旋状になっているのだろう。明かりは少なく、階段を支えている中心の円柱に、非常用ライトのようなもので微かに足元を照らしているだけだ。

カツン、カツンと二人が歩く金属音だけが辺りに響き渡る。

リナリスを先頭に後を着いていく形になっている宗也は、この不思議な場所について問いかけてみる。

「なあ……イギリスの一般家庭には、こんな風にでっかい地下があるのか？」

リナリスはそのまま前を歩いたまま、答える。

「言っただろ、ここに住んでる女は変人だって。普通の家に地下室があっても、ただの物置だったり、ワインを保存するためだけの小さな部屋があるだけだ。こんなアホみたいな個人の家は他にねえだろうさ」

ふん、と軽く相槌を打つが、やっぱり相当な変わったヤツなの

かと思うと、会う前からげんなりしてしまう。

歩き始めて数分。

ようやく最深部に到着したかと思えば、目の前には重厚な鉄製の扉。

それはまるで、ドデカイ爆弾が落ちてきても守りきれるようなシエルターのよう。

その重々しい扉を見て、宗也の口は引きつった。

「……あらためて聞くけど、ここにはどんなヤツが住んでるんだよ？ この中にいるとしたら、引き籠もりじゃなくて立て籠もりって言った方が正しいだろ」

「だから変人だって。頭に超弩級って付くけどな。こんな馬鹿げたシエルターに立て籠られたら、突破するのに最低でもスカッドミサイルでもブチ込まなくちゃならねえからな」

（そんなに強度があるのか……コレ。そんなレベルだったら、歩兵じゃまず突破不可能だろうが）

二人が扉の前で話していると、突然ウツーーーーっという甲高いサイレンが鳴りだす。両端の丈夫に取り付けられているライトが赤い光を放ちながら回転していた。

密室という空間で聞こえる高音は、半端無く耳に響く。そのため宗也だけでなく、リナリスまでもが呻きながら、両手で耳を押さえていた。

ゴツゴツゴツと振動しながらゆっくりとした動作で開かれています扉。

おそらくその扉も大きい音を出しているんだろうが、サイレンの音が大きすぎて聞き取ることはできない。

ただ扉が開かれるだけで、たつぷり一分は使っただろうか。

すべて開ききったところには、煩かったサイレンもなくなり、再び静寂を取り戻していた、

しかし、二人の耳には未だにキーンとした耳鳴りが残っており、軽い不快感に苛まれている。

（はあゝまるで長い間パチ屋にいたときみたいだ。あのときは、黄金の鎧を身に纏った騎士がなかなか負けなかったからな……）

そんなどうでもいいことを考えながらも、ついに閉ざされていた重苦しい扉の先が目に入った。

最初に思ったのは、凄いというただ一言。

子供の秘密基地とかそういうレベルじゃない。

正面には巨大なディスプレイが設置しており、周りにはよく分からない機械類が所狭し並べられている。そして、ガラス張りの奥の小部屋には、300テラフロップスぐらいは余裕でありそうなスーパーコンピュータが鎮座^{ちんざ}していた。

それはまるでどこかの司令部のような様相を醸^{かも}しだしている。

しかし、中には一人もいない。

俺たちが扉の前に立ったのを見計らったように開いたのでそれはないだろうと、室内に入りながら辺りをよく見渡してみる。歩きながら視線をキョロキョロとさせているが、改めて見るとやっぱり凄い。

宗也も男だ。

こういう部屋には、何か憧れのようなものを感じるのだろう。顔が子供のように輝いている。

そんな宗也とは違い、リナリスはまっすぐに正面にあるディスプレイへと歩いていく。

その足取りに迷いはない。

そして、ディスプレイの前に置かれている立派な社長イスの後ろに立つと、それを勢いよくクルリと回転させた。

「……なに？」

正面を向いたイスの上には、ポツンと胡坐をかくように座った一人の小柄な少女。

まだ幼い風貌、なにも感じさせない冷めた目、栗色の髪をボブカットにしている。

そんな彼女は抑揚のない声で文句を口にしたが、そんなことにも

まったく動じないのがリナリスだ。

「相つ変わらず陰気なキャラしてんなあ、アテナ。会うのは久しぶりだが元気にしてたか？」

自分の文句に応じてもらえなかったのにも関わらず、アテナと呼ばれた少女の顔に変化はない。

「……はい。あまり会いたくはなかったですが、久しぶりです、ただけは一応言っておきます」

「俺もあんまりお前さんに会いたくなかったさ。けど、ちょっと問題の解決のためにアテナの力を貸してもらおうかと思ってなあ」

その言葉に対して、微かではあるが顔を顰めたような気がした。

どうやら少女は単に無表情という訳ではなく、あまり感情が表に出ないタイプみたいだ。

「あなたがここに来るときは、手を貸せという話しかないですから分かっていましたが……問題とは、あなたの後ろに立っている人のことですか？」

「ああ、その通りだ。後ろの日本人、名前はソーヤって言うんだが、昨日からマフィアっぽい連中に終われててよオ。さっきなんて本気で撃ち殺されるところだったんだぜ」

宗也が襲われているシーンを思い出したのか、ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

一人イスに座っているアテナも何も感じさせない瞳でジイーと宗也を見つめる。

その二人の視線に耐え切れず、

「そんなにじつと見ないでくれ」

と、なぜか降参したように両手を挙げた。

「ハハッ、お互い初対面なんだ。自己紹介でもしたらいいんじゃないかねか？」

その言葉にコクつと小さく頷くと、宗也を見つめたまま話し出した。

「……私はアテナ。ずっと前からこの家に引き籠もってる」

「……それ、自分で言っちゃうんだ。っていつか引き籠もりつて気づいてたんだな」

まさかのカミングアウトに小さく呟く宗也だったが、そのまま紹介を続ける。

「俺は宇佐美宗也^{つちのみそうや}。日本から旅行に来たんだが、なぜか死にかけるほど厄介なことに巻き込まれている二十五歳だ」

その紹介に、ん。と可愛らしく返事する。

「二十五歳だったら、私より五歳も年上」

アテナの発現に、そうなのか、と普通に返したが、

「はああああ！？俺と五歳違うつてことは二十歳なのか！？そのなりで！？」

そう、アテナはどう見ても成人しているようには見えない。

身長も150cmあるかないかだし、彼女の頬は子供のようにふっくらしていて、プニプニと弾力もありそうだ。

「それは不本意。私はお酒もタバコも経験ずみのアダルティーな女性」

宗也の反応に不満があるのか、子供のように頬を膨らませた姿は、まるでハムスターみたいだ。その可愛らしい仕草を見てしまうと、子供っぽくて和む、と思ってしまう。

しかし横から邪魔が入る。

「なに怒ってたんだ、アテナ。お前、自分が子供に見られるのが嫌だからって白衣を着て、大人っぽく見られるようにしたいって言うてただろうが」

彼女はリナリスの言うとおり、科学者のような真っ白い白衣を羽織っている。

最初に見たときは、そのアンバランスな衣服に多少目を見張ったものの、他人の趣味だからと自分に言い聞かせ、失礼な言葉を飲み込んだのだ。

なのに、それを口に出してしまうリナリス。

その言葉にムムムツという唸り声を出しながら、なんで自分は彼

女にそんなことを話してしまったんだろうと悔やんでいるようだ。そんな顔をするアテナの仕草はやっぱり和む、と思ってしまう。

「……宗也は？ 子供っぽいって思う??」

子リスみたいに縋り付く声色に宗也は思った。

（はい、もちろん）

なんてことは、当然口に出さない。

日本では宗也も社会人の端くれだった男だ。会社は潰れてしまっただが……。

（それぐらいのことでは、この不景気という名の暗黒時代を生きている男は崩れないのだよ）

なので、

「そんなことないだろ？ こんなところに一人で住んでるんだ。引き籠もりだったとしてもちゃんと自立はしてるんだろうし、十分立派な大人だと思うぞ」

まったく根拠のない言葉でも、大人という単語に反応したアテナは、ん。と少し嬉しそうに微笑んだ。

「ハアン？ ソーヤ、お前はアテナの身体的な特徴にまったく触れてねえだろうが。当たり障りのない言葉で誤魔化すんじゃないぞ」盛り返したと思われた機嫌を、リナリスはものの見事に急降下させる。

その言葉にアテナどころか、ソーヤまでもが加わり、二人一緒に冷たい目で見つめた。

「……なんだよ」

さすがにそんな目をする二人を見て、自分が悪いと悟ったのか、尻すばみになりながら口を噤む。

その不貞腐れたような珍しい反応に、二人は満足した。

そこで宗也にある疑問が。

「そういえば、アテナは俺のことちゃんと“宗也”って発音できるんだな。リナリスが呼ぶときは“ソーヤ”って訛るのに」

「日本のアニメは好き。だから、和名はよく見る」

（日本のアニメは世界でもたくさん放映されているのは知ってるけど、それ吹き替えじゃないの？）

「……好きだから、日本語版の原作も集めるのは当たり前」

考えていることがばれたのか、聞き出す前に答えられてしまった。（……っていうか、それって当たり前なんだ）

宗也自身も、少年誌で連載していたものや、有名になったアニメなどは見たことはある。しかし、そこまでのめり込めるほど好きでもなかったのも、アテナの感性は少し理解ができなかった。

これが国を越えたグローバルゼーションというものと、まったく関係ないところで納得していたぐらいだ。

「おい、俺を無視すんじゃないよ。名前なんてどう呼んだって伝わればいいだろオが。だいたい、日本人の名前は角張り過ぎてんだよもう少し流れるような読み方にしろっての」

アテナと違って、こっちの女性は分かりやすかった。

その肝胆とした物言いに苦笑してしまう。

「ってか、お互い自己紹介はもう十分だろ？ さっさと本題に入らせ」

リナリスは宗也の態度が気に食わなかったようで、大きく舌打ちをしながら話を変えた。

「ちよつと待て、リナリス。お前に助けてもらったのは感謝してるし、事件に巻き込んだのは悪かったと思ってるが、彼女はまだ奴等と関係ないだろ？」

「ハアン??」

ここまで来ておいてなんだ？ とでも言いたそうな表情。

しかし返答は彼女ではなく、イスに座ったままのアテナから返ってくる

「……リナリスのことだから、どうせ無理やり手伝わされる」

諦めたかのような小さな溜め息。

それを聞いて、

「俺のことよく分かってるじゃないか、アテナ」

と、すでに彼女のトレードマークになっているであろう、口の端を吊り上げるような笑みをした。

その後、リナリスは地上に移動して話そうと言ったが、アテナのここから出たくないという、親がいたら涙を流してしまいそうなセリフで諦めることになった。

仕方がないので、そこらに転がっている物を椅子代わりにして、アテナの傍に向かい合うようにして座る。

現在、自分たちの状況を説明しているのは、専らリナリスだ。初めは宗也自身で起こったことを話していたのだが、途中からは事態の予想や見解なども必要になってきたため、より詳しく現状を理解しているリナリスに説明する立場をバトンタッチしたのだ。

一応、ここに到るまでの話は一段落したようで、少々疲れたようにポケットからタバコを取り出して、一服しようとする。

「ここ禁煙。精密機器にタバコの煙は厳禁」

アテナに注意されたリナリスは、タバコを吸えないことにイライラしているようだが、ここは彼女の家だ。家主がダメと言ってるのだから、喫煙してはいけないことは当たり前だ。

なんとか震える手でタバコを元の場所に戻した。

（それぐらいの礼儀はあつて良かった……）

僅かに安堵の表情を浮かべる。

「つで、どオだ？　こんだけ派手にやらかしたんだ。やり方は分からねえが、俺の推察だと執拗なくらい追いかけてくるのは目に見えてるだろ」

「……うん。国が管理する特別警察まで動かせるなら、相当な規模の組織。二人を放っておくのも危険だから、かならず探しているはず」

顎に手を当て、考え込むような態度で頷く。

「だろ？　んで、アテナ。お前さんの腕を見込んで、俺たちに手を

貸してほしい」

「……何を??」

「惚けんじゃねえよ。お前さんトップレベルの変人だが、それ以上にハッキングと情報収集能力じゃあ、この国で太刀打ちできるヤツなんていないだろ?」

二人で話がどんどん進んでしまっているが、どうやらこの子はすごい技能を持っているらしい。

「CIAにも追われてるくらい凄いアテナ様に、俺たちを狙ってる組織を見つけ出してほしいわけだ。そオすりゃあ、後は俺が片付けるだけだからなア」

最後には猛獣のような目をギラギラさせている。

それよりも、目の前にちょこんと座っている可愛い女性は、国際レベルの犯罪者さんでもあるらしい。

（言われてもまったく実感が沸かないな。もう、これぐらいじゃあ驚けないけど）

どうやらいろいろなことがありすぎて、驚きに対しては耐性ができたみたいだ。

「……リナリス、まだ昔のことを怨んでる?」

彼女の怖い顔を見て、突然そんなことを言ったかと思うと、アテナは悲しそうに視線を下げる。

その言葉にピクツと肩を震わすが、それ以上の反応はない。

しかし、彼女からは言いよの無い怒りと焦燥が滲みでていた。

やはり彼女には何かがあったのだろうか。時折垣間見えるその雰囲気は、出会ったばかりの宗也には聞けないような何かを感じさせてしまう。

そんなリナリスを見て少しだけ顔を上げると、

「……わかった、手伝う」

と言い放った。

過去という地雷を踏んでしまった償いか、それともただの哀れみか、まだ出会ったばかりの宗也には判断ができなかった。

了解の意思を伝えても、未だにリナリスの機嫌は戻ることはない。アテナも下を向いて、無言のままだ。

そんな二人の空気に耐え切れなくなつたというのもあるが、せっかく助けてくれると了解してくれた手前、このままの状態というのはよろしくない。

そこで宗也は、この場の雰囲気を一掃できる技を使うことにした。（はあ、神様。もしかしたら、彼女たちに助けてもらう前にこちらに召されることになるかもしれません。ですが、正直……俺にはこの空気に絶えられないのです。日本男児である宇佐美宗也。散る覚悟で望ませていただきます）

懺悔にも似たような、天にまで届きそうなほど強く祈る。

そして、宗也の有する唯一の大技を放つ。

グウワシツ！！

そんな擬音が聞こえるくらいの勢い。宗也はリナリスの後ろから、彼女に抱きつくような体制で胸を掴んでいた。

その突然の奇行に、アテナは珍しく啞然としている。彼女を知るものならば、ここまで表情を露わにしているのをあまり見たことがないだろう。しかし、そこまでの驚きを表すのは当然だ。怒っているリナリスの胸を掴むという暴挙に出たのだから。下手したら命はないんじゃないかと思うくらいだ。

そんな心配を他所に、宗也は以外と余裕があつた。

確かにすごい恐怖は感じるし、胸を掴むという愚行をしている自分が信じられない。

だが、この悪くなつた空気を戻すためという正当性と、さすがに殺すことなんてしないだろうという楽観性。その二つを武器に、宗也は仕方が無いんだと理由付ける。

だが、現実は違つた。

何度も向けられたことのある、人殺しのような凶悪な目。

（あ、やばい……目が完全にイッちゃってる。俺、たぶんここで死ぬ。でもどうせ死ぬんだったら……）

モミモミモミモミ。

追い討ちをかけるように、自ら死線に飛び込んでいく宗也。

しかし、そんな能天気な考えは一瞬で吹き飛ぶ。

なぜなら宗也の身体も一緒に吹っ飛んでいるから。

ゴキッ！！ という今まで聞いたことのない鈍い音とともに、顎に強烈なアッパーを喰らうという攻撃をされて。

そのまま辺りの物を巻き込みながら、派手に倒れこむ。

荒事など小さいころにした限りだ。今ではただの会社員だった男にとつて、この一発は相当きつかったらしく、すでにTKO状態だ。

ギリギリ意識はあるが、もう墜ちる寸前と言ってもいい。何とか仰向け転がって酸素を確保できたが、虫の息なのは変わらない。

そんな状態の宗也に向かって、リナリスは一步步ずつくりと近づいていく。倒れている横に立ち止まり、しゃがみこんだ。

そのまま顔を覗きこむようにして接近したことで、彼女の顔はすでに目と鼻の先だ。

朦朧とした意識の中、彼女は天使のような顔をして口を開く。

「悪かったな」

そんな言葉を聴いて、宗也の意識は墜ちた。

――数時間後

鈍い痛みを感じ、宗也は目を覚ました。

どうやら薄暗い部屋の床で寝ていたようで、なんとなく身体が重い。上半身を持ち上げた途端、鋭い痛みを顎に奔る。

グツと呻き声を挙げながら、片手で押さえたところで、自分の状

況を理解した。

（ああ……リナリスに殴られたんだっただな）

気を失う最後、なにかを言われた気がしたが、殴られたおかげでその部分だけは記憶が飛んでしまったようで、まったく思い出せない。

しかしあんなことをして、よく生きていられたなと安堵する。落ち着いて考えてみれば自分はなんて無謀なことをしたんだと、少し前の自分を呪いたくなる。

それでも、生きていることの喜びを噛み締めていると、女性の声が聞こえてきた。

「起きたか、ソーヤ。ちょうどいいところで目を覚ましてくれたぜ」

「……逆に、タイミング悪い」

まったく正反対の言葉をかけてくる二人。なんのことがよくわからないが、すぐく気になるのは間違いない。痛む顎を擦りながらなんとか立ち上がり彼女たちがいるところに歩いていった。

そこには家庭用テレビが置いてあり、二人は揃ってニュースを見ていた。

リナリスは先ほどの出来事について、なにも言わない。

あの一発で手打ちってことだったら宗也としても僥倖だ。あんな出来事、自分から掘り返したいなんて誰も思わないだろう。

そのまま彼女たちに近づき、一緒になってテレビを観賞する。そこに流れていたのは、ある事件の報道だった。

警官や野次馬が大勢いる現場。

（何か起こったのか？）

その答えはテレビに移っているキャスターによって暴かれた。

『臨時ニュースです。先ほど入ってきた情報によりますと、昨夜未明サウス・ミンスター通りで事件が発生しました。スコットランドヤードは、現場の状況から殺人事件と断定。さらに目撃者の情報と捜査から、犯人は日本人であると思われるっており、現在“ソウヤ・ウ

サミ”という名前の男の行方を追っています』

画面には、見に覚えのある名前。

その報道を聞いた途端、リナリスは面白そうに口笛を吹き、アテナはボーっと見ているだけだ。

代わって、犯人と思われる宗也は、

ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！？

またもや大絶叫した。

少し前にした生涯一番だと思っていたほどの絶叫も、ものの数時間もしない内に更新されてしまった。

新たな出会い（後書き）

宗也の打っていたパチンコは『GORO』です。

今現在、この種類の新台は『暗黒騎士呀鎧〇』ですが……

うん、初あたり50%の確率で確変に突入ってかなり辛いよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4551y/>

あなたの懺悔は何ですか？

2011年11月20日01時17分発行